

学校教育目標	かしこい子(知) やさしい子(情) がんばる子(意) げんきな子(体)
目指す学校像	一人ひとりのよさが輝き 笑顔と元気があふれる学校

重点目標	1 未来を担う子どもたちが将来を力強く生き抜くための真の学力の育成 2 主体的・実践的な態度を育成するための教育活動全体を通しての意図的な指導 3 学校を支えている地域の方や保護者を大事にし、地域とともにある学校づくりの推進 4 教育環境のハード面とソフト面の整備と安全・安心の確保 5 教職員のキャリアに応じて協働・協同し、組織を生かす学校・学年・学級経営
------	---

※重点目標は5つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価								学校運営協議会による評価	
年度								実施日令和8年2月12日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等	
学びの質の向上に関する取組	1	○R6年度の「学びの指標」の結果において、数値が1回目より2回目の方が大方の学級で数値が上がった。そのうち0.5ポイント以上上がっている学級が約半数近くあった。 ○個別最適な学びの手段として児童が学習方法等を選択する授業や、タブレット等による協働的な学びが、学年が上がるにつれ進んでいる。 ○授業において、発達段階に応じて学習の見通しをもたせるようにしている。 △授業で学んだ力を生かす場として、特別活動等全ての教育活動において、子どもが主体的に活動できる場を推進していきたい。	○「学びの指標」を生かして授業を実践し、アンケート結果に基づき指導法の工夫改善を図る。 ○小・中一貫教育の研究について、内容中・浦和大里小と更なる連携をし、より具体的な研究を推進する。	○「学びの指標」の2回目の数値が1回目より0.5ポイント以上の学級が半数を超える。 ○内容中・浦和大里小との合同研修会を年3回以上実施、授業公開を教科ごとに年1回以上実施する。	○1回目の「学びの指標」のアンケート結果を基に、各学級で指導法の工夫改善を図って授業を実践してきた。通常34学級のアンケート結果は、0.5ポイント以上が5学級、0.4ポイント以上が3学級、0.3ポイント以上が5学級であり、指標に届かなかったが、30学級で4項目中2項目以上上昇している。 ○夏期休業中に3校で9年間の連続した学びについて情報交換をした。またオンラインにて、浦和大里小と各教科部会で研究した授業実践の報告および協議会を年間2回実施し、互いに指導法の工夫改善を図った。 ○子どもから、全校で楽しく遊びたいという提案が複数出され、昨年度実施した内容をブラッシュアップして実施した。また、倉庫にある竹馬を使いたいという提案があり、一輪車も追加し運動委員会の子どもたちの管理のもと、休み時間に使えるようにした。 ○各委員会や学校行事の活動については、子どもたちの思いが生きるよう、寄り添った指導をしている。	B	○学校課題の研究主題にかかる「個別最適な学び」と「協働的な学び」のための手立てがまとまりつつあるため、様々な教科で取り組み、手立ての実効性を検証し、研究発表会に向けて整える。 ○内容中学校区3校で同日開催する小・中一貫教育の研究発表会に向けて、さらなる研究の連携を図り、共通理解の元進んでいく。	学校課題研究として取り組んでいる内容を理解した。今後も研究成果を授業改善につなげられるよう、取組を進めてほしい。主体性を引き出す教育活動については、学校生活に加えて地域との関わりを広げる取組が大切である。自治会の清掃活動など地域の活動に親子で参加することは、子どもの主体性を育てることにつながる。また、「自分発見！チャレンジup さいたま」のような事業を活用し、体験活動やボランティア活動への参加を促すことも有効である。	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
		○主体性を引き出す教育活動の充実	○「沼影小学校をもっとよくしよう提案」の提案内容の実現のために、具体的な助言や支援を行う。 ○委員会活動や学校行事等に児童の思いが生きるよう、各担当教員を中心に支援や指導をする。	○全校に関わる内容の提案に関しては年間2回の実践のほか、個別の対応は常時行う。 ○教員の支援指導による児童の思いが生きた委員会活動や学校行事になっている。	○夏期休業中に、外部講師を招くなどして、各種研修会を事例研究を中心に実施し、個々の子どもの様子、子ども同士の関わり合いを見極める目と対応の在り方を学んだ。2学期以降、各教職員が実践に努めている。 ○各学級のトラブル等に関しては、即日対応できるよう、学年、関係職員で共有し対応に当たっている。 ○トラブルやいじめを覚知した時点で、関係職員と管理職で情報を共有して方向性を決定し、できる限り関係児童からの聞き取りや保護者への連絡等、即日対応をしている。 ○道徳の時間には、各学年で発達段階に応じたワークシート等を準備し、児童が考えを書き留められるようにしている。	A	○教員が児童理解・生徒指導のためのスキルなどを身に付けることは、ますます重要であるため、更なる研修とブラッシュアップを行う。 ○早期発見・早期対応及び組織対応は重要であるため、教職員の一層の危機意識の醸成と情報共有に努める。		
心の子どもの発達やサポートに関する取組	2	○子ども同士の人間関係の対応は、学年の教職員を中心に複数で行い、管理職への報告を行うとともに、即日、保護者へ連絡する体制である。SCやSSWへの相談、関わりも積極的に行っている。 ○R6年度の児童アンケート「先生はいじめなどで困っていることをとりあげる」肯定的評価95%、保護者アンケート「教職員は相談に親身になる」肯定的評価93%となった。 △児童理解、生徒指導のスキルを教職員全員が身に付けられるようにしたい。	○児童理解・生徒指導の充実	○子どもの発達、児童理解・生徒指導に関する研修会を校内で実施する。(理論と実践両面が含まれるように) ○毎月の生徒指導・教育相談部会による確実な情報共有と情報伝達をする。 ○学年会等で積極的に情報共有を行う。	○研修会後に各教職員が実践し、成果を共有している。 ○教職員が一人で課題を抱えずに、学年単位等で情報を共有し対応している。	A	○教員が児童理解・生徒指導のためのスキルなどを身に付けることは、ますます重要であるため、更なる研修とブラッシュアップを行う。 ○早期発見・早期対応及び組織対応は重要であるため、教職員の一層の危機意識の醸成と情報共有に努める。	SNSの利用が広がる中で、LINE等を通じたいじめが複雑化していくことに不安を感じている。一方で、学校が法令に基づき、丁寧な聞き取りや保護者への報告、継続的な見守りなどを複数の教員で時間をかけて行っていることは評価でき、先生方の丁寧な対応には感謝している。今後も家庭と連携しながら、いじめの早期発見・早期対応に努めてほしい。	
		○いじめ等への早期発見・早期対応	○いじめや悩みを早期発見・早期対応のために心のポストや心のカード等を活用する。 ○「特別の教科 道徳」を要とする道徳教育を充実させる。	○人間関係のトラブル等の初期対応を適切に行い、いじめを未然に防ぐ(いじめを覚知した際、関係教職員間で素早く情報を共有し、早期対応をする)。 ○毎回の道徳の学習で、児童が自分の考えを書き留めている。	○夏期休業中に、外部講師を招くなどして、各種研修会を事例研究を中心に実施し、個々の子どもの様子、子ども同士の関わり合いを見極める目と対応の在り方を学んだ。2学期以降、各教職員が実践に努めている。 ○各学級のトラブル等に関しては、即日対応できるよう、学年、関係職員で共有し対応に当たっている。 ○トラブルやいじめを覚知した時点で、関係職員と管理職で情報を共有して方向性を決定し、できる限り関係児童からの聞き取りや保護者への連絡等、即日対応をしている。 ○道徳の時間には、各学年で発達段階に応じたワークシート等を準備し、児童が考えを書き留められるようにしている。	A	○SNSのトラブルも増えてきたため、「インターネット安全教室」「スクールロイヤー特別講座」などの実施の際、保護者も参観できるようにする。 ○道徳の指導法の研修内容を充実させることで、教材研究の充実と発達段階に応じた発問の質を高めるようにする。		
地域とともにある学校づくりに関する取組	3	○地域や育成会主催の子どもが参加できる行事が多数あり、参加する子どもが増加している。(R6年度教職員アンケート「家庭地域との連携」肯定的評価79%(A評価前年度比+23ポイント)、保護者アンケート「地域の活動に積極的に参加」肯定的評価53%(前年度比+6ポイント)) ○地域には、学習等に生かせる人材や教材が多い。 △地域の行事への参加は徐々に増えてきてはいるが、全国平均と比較するとまだ参加率が低い。 △学校内や登下校中のあいさつは増えてきたが、地域の方へのあいさつは、更なる広がりが必要である。	○学校運営協議会を軸とした地域との連携	○①学校運営協議会や学校地域連携コーディネーターと連携して得た人材や教材を、教育活動で活用する。 ○昨年度から続けている「あいさつのわ」や児童会のあいさつ運動を保護者や地域にも働きかけ拡大する。	○3年の総合的な学習の時間の地域を学ぶ際や、1年生の生活科の昔遊びなどで地域人材を活用する。 ○「あいさつのわ」が地域や保護者に拡大し、教職員・保護者・児童へのアンケート結果がR6年度比+5ポイントとなる。	B	○地域人材が豊富なため、授業の講師として、また、委員会活動やクラブ活動等でさらなる活用を図る。 ○あいさつについては、地域との連携は進んできているため、保護者も率先して行えるよう、学校での活動を学校だより、懇談会等でのさらなる周知を図る。	子どもたちはあいさつができるようになってきているが、保護者のあいさつはまだ少ない。保護者も率先してあいさつを行えるよう、引き続き取組を広げていくことが大切である。地域行事においては、親子で地域に関わる機会を広げていくことが望ましい。併せて、地域行事やイベントに関する情報を共有する仕組みが必要である。	
		○教育活動等の積極的な発信	○学校だよりやHP、ポスター掲示等で地域行事や育成会のイベント情報を掲載するとともに、各学級でも声がかかる。	○地域や育成会のイベントへの参加率がR6年度より上がる。また、感想に来年への期待が寄せられる。	○3年の学習で地域の方を講師に招き、内容まじりの話をしていた。子どもたちはまじりの伝説に驚き、地域への愛着の素地になっている。 ○「あいさつのわ」は、登校時・下校時に定着してきた。また、児童会でも積極的にかいさつ運動に取り組んでいる。アンケートの結果は、教職員+23.3ポイント、保護者+1.2ポイント、児童+4.6ポイントとなり成果があつと言えらる。 ○地域行事や育成会のイベントについては、地域のご協力によりポスターを掲示したり学校だよりに掲載したりして情報を提供することができた。参加率は、昨年度比+5.4ポイントである。イベントに参加した子どもからは、「楽しかった」、「また参加したい」という感想を得られている。	B	○地域行事や育成会のイベントへの参加率が上がってきているものの、市の平均と比較するとまだ低い。地域性もあると思われるが、参加率を高めるため、自治会・育成会等との更なる連携を図り、周知を充実したい。		
教育環境の整備に関する取組	4	○R6年度の教職員アンケート「学校施設の点検・整備」肯定的評価86%、うちA評価34%である。 ○R6年度、修繕箇所を確認し、校内での修繕と業者依頼の修繕等に分類し、簡易な修繕は1週間以内の対応ができた。 △教室や廊下等のスペース、荷物をかけるフックの不足により、図工の作品を展示する場所や児童の持ち物を余裕をもって片付たり収納したりすることが困難である。	○施設・設備の整備と安全・安心な学校生活	○教職員による月1回の安全点検における確実な確認と、その後の速やかな手続き及び対応を実施する。	○安全点検により修繕箇所を発見し、児童のけが防止等につながる。	A	○施設の老朽化による修繕に予算を割かざるを得ない。令和7年にできなかったトイレの修繕は、教育委員会と連携し計画的に進めていく。また、安全点検を今年度同様に充実させる。	義務教育学校の開校延期により現校舎を今後も使用することを踏まえ、施設・設備の維持管理を適切に行う必要がある。老朽化や故障箇所については、児童の安全・安心な学校生活を確保するため、市教委による速やかな修繕等の対応を望む。	
		○学習環境の整備	○校内の整理整頓を徹底する。 ○掲示物、緑化活動による美しい環境をする。 ○教職員の言語感覚(正誤・適否・美醜)の向上を図る。	○校内が清潔にまたは美しく保たれる。 ○教職員の言語感覚が高まり、作成資料の精度が高まるとともに、児童への文章の指導力が高まる。	○安全点検は、担任・安全部・事務職員・教頭・校長と情報を共有し、校内での修繕や業者依頼の修繕等、組織的に対応できた。一方、トイレの老朽化による修繕のための予算が足りず、教育委員会と連携している。 ○机上の整理、机の配置、棚や床面の整理整頓等、学級内を清潔にする意識が子どもの中で高まってきた。 ○教職員の言語感覚については、職員会議等で周知したこと、資料の表現を正すようにしてきた。	B	○教室内は全体的によく整えられているが、共用部分の廊下や階段等は床のシミやほこりが目立つ。美化委員会の児童が掃除の仕方を提案できるよう支援を行えるようにする。		
教職員のキャリア形成に関する取組	5	○全体的に若手教員が多いが、大幅な人事異動により、年齢構成・経験年数については、R6年度と比較すると、バランスがよくなった。 ○各分野の専門性が高い教職員が多いため、学び合いができる環境にある。学習指導、学級経営、生徒指導等の指導技術、ベテランから中堅若手教員に学校行事の運営等の継承を推進したい。 △ICTの活用方法等キャリアに関係無く必要な知識・技能等については、全教職員で研修を積んでいく必要がある。	○教職員の資質向上	○教職員一人ひとりが専門性を高めるために、研修等に積極的に参加するようにする。 ○学習指導については、指導案検討、研究授業・研究協議会を実施し、教科のものの見方・考え方を学ぶ。	○校内研修において研修ごとに振り返りを行うことで、教職員が自身の理解度等を確認し、指導に生かしている。 ○全教職員参加の研究授業年間2回、各教科のサークル内の研究授業を各1回ずつ行う。	A	○一覧表を生かして(自身の変容が分かる・他の教員の記述を参考にできるなど)、振り返りの入力に継続する。また、教育委員会主催の研修会やパワーアップ講座への参加も積極的に参加できるよう周知する。 ○各教科において研究授業を積み重ねていく。教材研究・指導案検討において、指導主事からの理論的な補完や指導法の享受により専門的な資質の向上を図る。	研修の振り返りの共有や研究授業の実施など、計画的に研修を進めていることを理解した。今後も研修の成果を授業改善や指導力の向上につなげていくことが重要である。また、「キャリアナビ」を活用して教職員一人一人が自身の専門性の向上を図るとともに、互いに学び合いながら協働・共同する職場づくりを進めていくことも大切である。	
		○キャリアに応じた育成と協働・共同する職場の構築	○キャリアナビを活用し、各教職員が自身の強み弱みを自覚し、目標を定めるようにする。	○キャリアナビの自己評価の2回目より1回目と比較して数値が伸びる。	○研修ごとに各自の感想や振り返りを一覧表に入力できるようにしている。他の教員の記述内容も見ることができ互いの刺激になっていると共に、自身の授業実践を生かすことができる。 ○計8教科の代表者による研究授業は、指導法や事前の準備、目指す姿等の共有、招聘した指導者からの指導等、自身の授業にも生かすことができている。	A	○キャリアナビの自己評価で、年度当初に目標を定め1月に振り返った。数値は4段階評価で平均+1.8ポイントである。記述からも、自身の強み弱みを意識して日々の授業実践を行っていたことが分かる。		